

大垣真宗学院同窓会総会

一〇一九年六月八日 於 呼應學舎

## 飯山 等先生 特別講義 講題 「受用と成熟」

「受用と成熟」というテーマを出させていただきました。それは単なる、人生を考えるという視点だけではなく、親鸞聖人のみ教え、つまり、浄土真宗と確かめ、私たちに広開してくださった、そのことを受け止める私たちの姿勢を確認したいということです。

今年六月に将棋の羽生善治名人が、故大山康晴名人の通算最多勝を更新した折のあるインタビューが心に残りました。インタビューが「羽生さんにとつて将棋とはなんですか」と問い合わせました。よくこういう聞き方ありますね。「あなたにとつて音楽とは何ですか」「あなたにとつて詩とは何ですか」というような、「みんなさんだったら、「お寺とは」とか、そういう「……とは?」」という質問です。

私もこの歳になりますと、「先生にとつて浄土真宗とは何ですか」とか、「お寺とは何ですか」と聞かれ、歳を重ねていますので、質問に応えるないといけないと思って、無理してその場の答えを自分の中から引き出すことがあります。

その時、羽生さんはどう答えられたかといふと、「将棋そのものを理解しようとは思っていないくて、限りなく不可能だと思っています」。こういうふうに答えられた。そこに私はすく親鸞聖人を感じたのです。

親鸞聖人も関東の方々、それから善鸞さまのことがある中で、きっと、自分自身の中に「私にとつて浄土真宗とは」という問い合わせ起こつたでしょ、し、誰人からか尋ねられたのではないか。

そのときに親鸞聖人はどのように答えられたでしょうか。書き残されたものから私が感じるのは、この羽生さんが言われた、「理解しようとは思つていらない。限りなくそれは不可能だ。だから不可能だ」ということで、自分なりに少しずつ前に進んでいきたい」ということではなかつたかと思うのです。

なにか、八十歳を越えていろんなことがあるなかで、自分の名前で自分の責任において、いろんなお書き物をなさつてゆく。そのことが、この羽生さんの言葉を読んだときに、わたしの中ですつと親鸞聖人が感じられたのです。

ある研修会に行つたとき、「私にとつて仏様とは」というテーマが掲げられていきました。お話をさせていただいた後、班別座談会があり、班ごとの発表があつた後、私にコメントを求められました。そのとき、「私にとつて仏さまとは」というその問い合わせにされてみたらどうですか」と言いました。

「仏様にとつて私とは」。これはナチスの強制収容所であるアウシュビツツについて書かれているヴィクトール・E・フランクルさんが、「人生から何をわれわれはまだ期待できるかではなく、むしろ人生が何を期待しているか」と言わされた。こういう問い合わせ、あのアウシュビツツを経験していく中で、ヨーロッパが人間崩壊の途を辿つて行く、人間の歴史を完全に壊滅させてゆく、そういう局面に遭遇したときに、「私たちが人生に何を期待するか」ではなくて「人生は私たちに何を期

待するか」、こういうふうに方向を変える、それに新しい一步というものが生まれていくのではないか。

「何々がそれと分かる」。もちろんそれはそれで大切なことでしきれども、分かるといふときは、その方向が、先ほどの羽生さんのように「将棋とは何だ」ということに明快な答えを持つとか、「私にとつて仏様とは」へつらうことだ」と答えを持つことが、それが学び分かるということだとするならば、それは、親鸞聖人から遠ざかっていく学びではないか、ということを強く思っています。だから分からぬといふことが大事だと言おうとしているわけではありませんが、その「分かる」ということを書き出す問い合わせいうか、問うということ、その方向を、よくよく考えてみなければならぬ、そんなことを思つております。



そういう中で今日のテーマ、「受用と成熟」ということです。気づいたことから言いますと、「老病死」というのは「利用できない」ということです。例えば、若さであるとか知識とか能力というものは、それを持つて利用していく。私自身、学校という場で責任を持つものとして、学力の向上や進路の実現を果たしていく、その子がきちんとした能力、スキルを持ってゆく、人間性を育てていくということに責任を持つ形で、若者に向かい合つていく。

学校で私は最年長ですけれども、田舎に帰りますと、ほぼ最年少です。そこでは、「今年の私は去年の私よりも何々ができるようになった」ということは、きつい言い方をすれば、ない。「去年

できなかつた」などが、今年であるようになつた、「それがうれしい」というやうに生きているわけではないのです。でも、「あかんようになった」という言葉しか出ないとしたら、どういうことなのだろうと。

「真宗とは仏教なのかどうか」ということが時々議論になります。縁起の思想とか、空の思想と、本願の思想はこののような関係性を持つから、真宗も仏教なのだといつも言われたりもします。けれども、「何か違うなあ」と私は感じています。

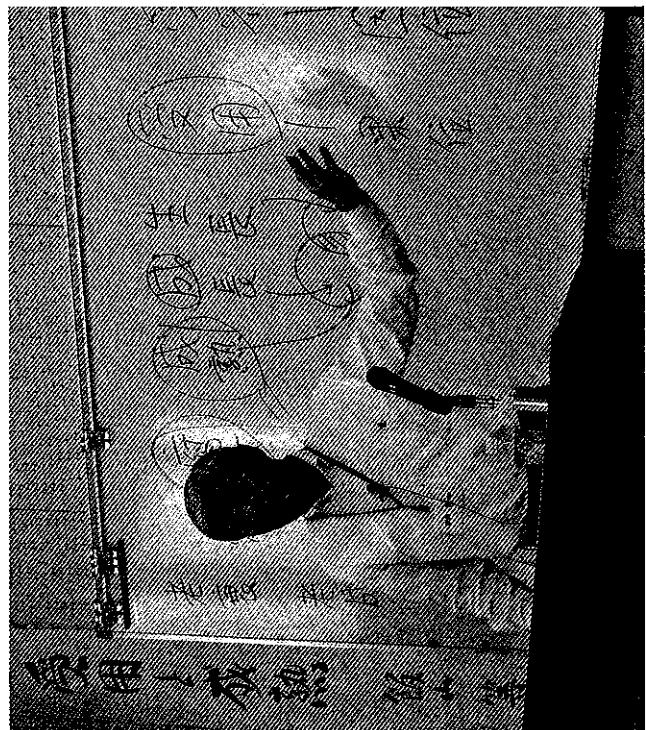
真宗が仏教だということは、お釈迦様が老病死、つまり利用できなくなりにぶち当たられた、その利用できないものをどのように人生の内容として生きて行くかというヒントを考えられた、そのヒントが仏教の基本にある。それは親鸞聖人が「他力」「本願に帰す」とおっしゃるヒント、ひとつなのだと思います。そこを考えていただきたいと思っています。

そこから「利用」と「受容」と「愛用」ということがあります、若さとか美しさとか活力などは「利用」できる世界、外に展開していく。それに対して、受け入れるという世界が「受容」ということです。この利用に対して受容ということが対義語になっていることに私は違和感がありました。「愛用」という言葉があるのは知っていました。その愛用という言葉と受容という言葉はどう違うのだろう、と。

利用の反対にあるのは受容とされていることについて、いろいろ辞書を調べる中で、広辞苑には、利用と受容と愛用というのがお手元のレジュメのように説明されています。新明解国語辞典というのにもう少し小さな辞書ですが、それには

利用と受容の説明はあつても、愛用という言葉は語として採録されていません。

広辞苑という辞書は日常に使われているかどうかという基準ではなくて、伝統的な歴史的にあつた言葉をできるだけ採用していこうという姿勢で編纂されていて、大きな厚いものになっています。でもハンディな辞書では受用という言葉は採用されていない。辞書というはある言葉が使われなくなると、版が変わるとか、これはもうなくなってしまう。



て新しいのを入れていこうとなるのです。

これだけで一概な言い方はできませんけれども、「愛用」という言い方、あり方、生き方は、私たちの日常の中で失われてきた、失われてしまつたあり方として、この新明解では採用しな

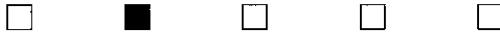
かつたのではないのかなと思います。そして新明解では、「利用」の説明を「本来そのためにあるわけではないものを、うまく使って何かに役立たせること」としている。作為というか道具を使うように。そういう利用というのは、こちらが中心にあって周りのものがその生き方を強固にというか増殖させていくために使っていくというのだと。そのとき、増殖、強固にするために、老いどか病むとか死ぬということは、まったくその利用価値のないものになるわけです。

次に気になったのが、「生長」という言葉。そして同じ音で「成長」という言葉がある。なんで二つあるのだろうか。ややこしい。広辞苑と新明解では生長と成長について、意味として同じ部分があります。そしてそれぞれの言葉でしか言えないものがあります。

広辞苑を例にとると、生長の方は「①うまれ育つこと。②俗には発育と同じ意味で用い、生物学では生態の量の増加を指す」。量的な増加。例えば身長が伸びるとか、体重が増えるとかというのを生長と言います。ここは一つの辞書は同じ意味で用いられます。

一方、成長について広辞苑では、「育つて大きくなること。育つて成熟する」と。この「成熟する」という意味は生長にはありません。どこで成熟ということを言うのか。成熟というのは、広辞苑によれば「①穀物や果物が十分にみのること、また、人間の心や体が十分に生育すること。②物事が最も充実した時期に達すること」と説明してある。新明解ではさらに「①食用に適する状態に達すること。②独立した営みが可能な状態に達すること」という言葉が添えてあります。成長には、私たちが歳を重ねていく中に、成熟をもたらすと

いう意味があるのです。



では、その成熟というは、「腐敗、腐る」と同じことなのかなが、違うのか。さてどうでしょうか。実は腐敗と成熟は化学反応的には同じです。だから生物でも果物でも、腐ると熟すのは同じです。

果物が熟して柔らかくなるのはどうしてか。それは細胞壁という、「私は私だ。隣の細胞とは違う」とがんばって細胞壁で隔てていたその細胞壁が壊れて、隣の細胞とこちらの細胞の細胞液が混じり合っていくのが、熟していく、腐敗していくということです。

それから、「発酵する」と言いますね、成熟ということは広く、発酵と腐敗を包んだ概念です。その中で美味しいなるのを私たちは発酵と言います。良くなること。腐敗というのは悪化すること。でも生物現象としては同じです。同じなんですよ、果物が腐っていくことと、熟していくことは。一つひとつ細胞壁が壊れて、おれがつていうのが死んでいくわけですけれども、死んでいく中に腐敗という劣化と、発酵という良化がある。良くなることがあるとすれば、それはどこにあるのだろうか? ちがいは。

私たちが歳を重ねて行く中で、「老化」するのと「老熟」するのどちらがうのか。老化するというのが「老衰」ですよね。老によって成熟するのが「老成」です。だから、江戸時代の行政の役職では、もつとも老成した人を大老といい、老中と言った。老いという字がとってもいい意味で使われている。今、老いという字がいい意味で使わ

れている場面は本当に少ない。若いという字はいい意味で使われている。やっぱ若さだ、アンチエイジングだということで、老いというものはできるだけ排除したい。だからテレビではそんな宣伝ばかりですね。写真見せて、この人何歳だと思います? 若く見えますね、と。

でもたとえば六十年しか生きてない人に八十歳だねと思わせるのは、中身濃く生きたってことですよ。若く見えますというは、薄くしか生きれないのだ」と。それは体力的なことは別としてね。六十の人には七十超えているように見えましたっていうのは、これ老中、大老という意識、老成ということなのです。あなた、人生それだけ深くたくさんのこと経験してこられて、酸いも甘いも経験してそういうことを分かる成熟をなされてみえますね、とそういうことが生きていた時代があった。

でも、今は私たち自身が老いというものを拒否するように生きています。ある落語家のまくら(前振り)ですが、おばあちゃんに「おばあちゃん、生きてて何かいいことある?」と聞いて、おばあちゃんが言下に「ないつ」と答えた。これって若い子たちに人生を絶望させる言葉ですよね。「私はどうしたらいいのだろう」となる。じゃあ「歳とつたらな、こんなひといどあるのやで」という世界はないのだろうか? そんなことが、親鸞聖人が八十何歳になられて「なんかいいことがありますか?」とたずねられて、「ようよういだくことができました」という、先の羽生さんの、「自分なりに前に少しずつ歩めるようになりました」というそのことがね、大事なんじやないかなと思います。

□ □ ■ □ □

話が飛びますけれども、歎異抄の第一条ですが、最後のところが私分からなかつたのです。曾我量深先生のものを読んでいて、そういうことなど理解はしていたのですが、『愚身の信心におきてはかくのべとし。このうえは、念佛をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからいなり』(聖典六二七頁)という言葉が、なんか気にさわる言葉としてありました。

多くのかたは、親鸞聖人が私たちに厳しいお言葉として言われた、と解釈されています。これを曾我量深先生は、「面々の御はからいなり」と静かに言わされた。こう読むことではじめてこの聖人のお言葉が受け取れるのだとおっしゃっている、と広瀬某先生の講義の中でお聞きしたことが印象深く残っています。もし私がそれを言われたとして、そして親鸞聖人の身になつたとき、どのような思いでその言葉は言われ、聞かれ、唯円の心に残つていつたのかといふことを考えてきました。

それを考えるヒントになつたのが、昨年九月に亡くなつた樹木希林さんの、「え、私の言葉に救われる人がいるって? それね、依存症よ。あとは自分で考えてよ」という言葉です。親鸞聖人のところに来た人が尋ねたのは、救われる言葉を求めていた。その時に親鸞聖人が「念佛で救われていくのです。私がその通りだし、あなたたちももう一度しつかり聞法していただき、念佛して参りましよう」と仰つたら、それはその言葉によつて救われる人を生み出す。「やっぱりそうだ、しつかり聞法しなきやいかん。念佛は大事なのだ」と。

それを求めたひとりが唯円だと思ひます。確か

な強い言葉を、その言葉が救いであるような言葉を求めて関東からやつて来られた。そこには、最後に「信じだてまつるとも、まだすんとも、面々の御はからいなり」という言葉に出会って、びっくりして立ち止まり、自分自身がその求め方において、それが基本的に間違っていたというか、出会えない求め方であつたということに気づかれたのが唯円であった。

それをストレートに教えてくれたのが樹木さんの言葉でした。「私ね、話したって何の得にもなんないんだしね、もうやなのよ、話すの」というのを、インタビュアーが「いや、あなたの言葉によつて救われる人がおられるんですよ」と言われて、「え、私の言葉に救われる人がいるって？それね、依存症よ。あとは自分で考えてよ」と。

私たちちは何か魅力的な言葉、魅力的な人物に出会つて救われようとするのだけれども、それは新たな「病」を抱えることです。それが救いだと思つて悪いことはひとつもないのでしょうかけれども、少なくとも親鸞聖人は「それは違う」と受け止められた方だと思います。そういうないと、あの吉水の百日間はないと思います。救われる言葉を求めての百日だったら、そんなにバリエーション豊かに法然はしゃべれなかつたと思います。どのような人が来られても、同じように一つことをおつしやられたと惠信尼は書いておられます。

それは何かといふと、言葉に依存する私ではなくて、「後は自分で考えるという自分」が生まれ育つていくための百日だつたと思います。ここに完成形の思考がある、だからもう私は思考しなくてもこれをなぞるだけで生きて行けるという思考停止の自分がそこに生まれ育つというのではなく、後は自分で考えていく、その自分が育つため

の百日だつたし、親鸞聖人の南無阿弥陀仏というのは思考を停止して、コピペしていく生き方を生み出したのではなくて、後は自分で、というそのことがあるのではないかと思います。

その「後は自分で」というのが法然上人から賜つた生き方だと思います。多くの人は、先生からお話を聞き、その先生に師事すると、その言葉をどれだけきれいにクリアに複写できるかというのを、それが聞法だ、学習だとしていきます。でもそうじやなくて、少なくとも親鸞聖人は「後は自分で考えてください」という法然上人からのメッセージをいただいたのが、あの吉水の百日であつた。そこに、後のつねなるときには、法然という方が大きな重しどりでいる。

それは、たとえば脚本家の倉本聰さんが「高倉健の映画には、高倉健演じる主人公が頭の上がらない、平服する存在の人が必ずいる」ということを言つていました。それが高倉健の映画を深くしている。お山の大将にしていないといふのです。倍賞千恵子演じる奥さんであつたり、嵐震寿郎であつたり。そういう人が、絶対的な重しどりとして存在している。その重しによって、自分自身というものがブレない。

高倉健が座右の銘にしたのが、「我行精進 忍終不悔」(聖典十三頁)という言葉であつたと伝えられています。「わが行は精進にして、忍びて終に悔いじ」と。自分がお山の大将になつて自分がたくさんものを増殖して獲得していくのではなく、何かに仕えていく。あの「我行精進 忍終不悔」というのはそういうことでしょう。立派な私になつていくといふ宣言ではなくて仕えていくといふ大きな世界というもの、確かな世界に出会つたといふことです。

そこに、新明解が採録していないこの言葉に象徴される、利用というものがかなわない世界であつたときに、受容するしかないという消極的な選択ではなくて、その受容するしかないと思っていた私の狭さなり、身勝手さというものが、細胞壁が破られるように柔軟心、細胞が柔らかくなる、その柔軟心によって、はじめて受用するという、死と病と老いるということを受用するという在り方が開かれる。そこにそれを積極的に「受用」してゆくという新たなあり方が開かれる。これが「他力に帰す」というような親鸞聖人の姿勢ではないかと思います。

他力という利用価値に私は順じていくのではなくて、私の中に一切の利用という在り方を断ち切ることによって受用ということがあります。受容するしかないという、「しかない」を転じて受用ということによつてはじめて一歩踏み出していける。



お寺の法話の時、冗談で門徒さんに訊くのです。みなさんのところで病院がなくなるのと、お寺さんがなくなるのどちらが不都合ですか？つて。素朴な方は「当たり前やないか、そんなこと。お寺なくなつてもいいけど、病院なくなつたら困る」って言われます。ストレートですよね。その、寺はなくなつてもいいけど病院がなくなるのは困るといふことに乗つかつて、今の国的人生百年計画がある。今日まで元気で、明日死んで、と。そういうことが受用という言葉をなくしてしまつたのではないでしょうか。「利用」という中では、病院は利用できるが、お寺は何のためにあるのか分

からない。利用価値がないと思っているのです。でも、利用価値がないと思われているということは大事だと思うのです。お寺も利用価値がありますよつていう提供の仕方をしたら、「いや、お寺で奉式やるよりも斎場でやつたほうが便利やし」というだけの話になってしまいます。つまりそれは利用しようという在り方が抱えてしまう問題を、いや、そうじやないと言つていけるかどうかだと思います。

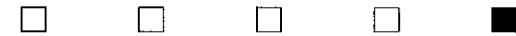
こういうことを言つことで何が転回するとは思いませんけれども、何か今、生きることがプレッシャーになっている、こここの問題だけではなくて社会全体のバイアスのような形でプレッシャーになつてゐる中に、ひょつとしたら真宗寺院の果たす役割というのかな、御札も売つていない、御祈祷もしない、何か具体的な利益があるというわけでもない、そういう中に私たちに何か気付いていく、気づいてもらつていう世界というのがあるのではないかのか。

樹木さんは「法華經」に出会つていかれた方ですが、親鸞聖人に出会つてはしかつたと思うひとです。レジュメにのせていますが、ダイバダツタのことを引いて、「人は不自由さに仕えて生きていいく」とあります。不自由さに仕えるつていう言葉の方は新鮮でした。こうやつて人間は自分の不自由さに仕えて成熟してゆく。不自由さをなんとか乗りこえていくのではなくて、不自由さに仕えるといふあります方、わざかな言葉の差異ですが大きなことだと思っています。

そして、「有り難い」という言葉。私は「有ることが困難だ」「有ることだけで尊い」という意味で理解していました。それに対して、樹木さんは「有難」というのは「難が有る」だと言うので

す。難が有る人生というのは、お釈迦様にとってのダイバダツタだと。曾我量深先生は初期の論文で「王倉城の悲劇のお蔭でお釈迦様は釈迦牟尼世尊になられました。もしあのイダイケの釈尊への否定の言葉がなかつたら、お釈迦様はたんに多くの方から尊い勝れた方だという称賛の中で生きられただけでしょう。イダイケの批難によつてはじめて凡夫に気付かれたのがお釈迦さまです」とおつしやっています。

有難、難が有るというなかで尊さに出会わせていただく。親鸞聖人が生きられたそのお姿には、有難の中でこそいただけだ、だから伝える気力と使命というのか、それがどんどん深いものになつていつた。現実の難といふもの、環境であつたり、自身の老い、病むといふ中で、問い合わせ先鋭化することで共通のものに出会つていくといふのかな、特殊な先鋭化でとがつていくのではなくて、曾我先生で言つと、深く深く地中にといふ言ひ方をされてはりますけれども、通底していくものに出会われてはりますけれども、通底していくものに出会われてはります、そういうことがあるんじやないかと思います。



その受用、受け取ることによつてその心を生きていかれた、そのお姿がレジュメ2枚目の「觀經三心釈」の「須（すべからくすべし／もぢる）」という語についての親鸞聖人読み取り方にあるのでしょうか。そして蓮如上人は「他宗には、親のため、また、何のため、なんどぞ、念佛をつかうなり。聖人の御流には、弥陀をたのむが念佛なり」（聖典八八七頁）とおつしやる。「弥陀をたのむ」というのは受用するといふことです。念佛を利用

するあり方から、念佛を受容し、受用するあり方へといふことです。

『一念多念文意』では「如來の本願を信じて一念するに、かならず、もどめざるに無上の功德をえしめ、しらざるに広大の利益をうるなり。自然に、やまやまのひとりを、すなわちひらく法則なり。法則といふは、はじめ行者はからいにあらず。もどより不可思議の利益にあずかること、自然のありさまともうすことをしらしむるを、法則とはいふなり」（聖典五三九頁）とあります。

求めて意識的にこれがうだなと思つていくときには、必ず利用という心根がそこに介在していく。その利用心がその言葉を受取つていく。それに対して、「もどめざるにしらざるに」とおつしやつて、それが主題的になつてゐるのが一念多念、一念往生、多念往生といふ中で、どちらの利用の仕方がどれだけの人生を確立するかといふ問いと戸惑いの中で、親鸞聖人は「念佛往生」と言はれた。利用ではなくて受用といふところにはじめていたでいい。そこにわたしたちが有ることの十全なる成熟がある、そんなことを思います。

成熟には腐敗と発酵がある。熟するのと腐るのとほんとに紙一重。だからややこしいんですね。本人は熟しているつもりでも、実は腐つてはいたやつかいものになつてはいたといふこともある。難しこころです。

考えるヒントとして、御聖教の「須」なぜ親鸞聖人はこう訓めたのか、といふことを感じていただけたらと思います。

以上要旨

※当日のレジュメは同窓会ホームページから閲覧できますので、併せてお読みください。